



# 父の描いた絵 (短編)

---

比良岡美紀

---

(2013年)

---

父が、死んだ。あっけない死だった、と母は言った。僕は信じられなかった。

父は何度も病院に運び込まれ、そのたびに僕は母から連絡をもらった。原因は酒だった。飲み過ぎて転倒し、その拍子に頭を打ったり、崖から転落したこともある。あわてて帰郷すると、父は元気に僕を迎えた。

「どうした、血相変えて」

「どうしたじゃないよ、入院したって言うから」

「誰が」

「誰が、って、その……」

ちらと母を見た。母は僕の視線を避けるように目を伏せた。父は母に目をやり、困ったものだ、と言うように笑った。

「心配しなくても、俺はそう簡単には死なないよ」

「そんなこと言って、いつどうなるか分からないじゃない」

姉が言うと、父は手をひらひらさせながら、大丈夫大丈夫、と繰り返した。その様子に、母も姉も、そして僕も、すっかり拍子抜けしてしまうのだった。

そんなことを何度も経験していたから、父の死はまったく実感がわかなかった。母からの電話も、何かの間違いだと思ったほどだ。でも、母が間違えるはずはない。父は死んだのだ。

「明日お通夜でしょ。行かなくていいの」

彼女が言った。僕は天井を見ながら、いいよ別に、と答えた。

「そんなわけにいかないわよ。私も一緒に行くから」

「いいって言ってるだろう」

何よそれ、と彼女が言う。しまった――。思わず唇をかんだ。

「結婚するんだし、ご挨拶したいの。お父さんには、もうお会いできないけど」

うん、と僕はうなずいた。彼女は正しい。そう、常に正しいのだ。僕は言うべき言葉を見つけられず、ため息をつく、姿勢を変え、彼女に背中を向けた。

「じゃあさ」

背中越しに彼女が言う。

「納骨のときに行こうよ」

「納骨？」

僕はまた姿勢を変え、彼女と向かい合わせになった。

「四十九日の法要に行くの。それで、納骨にも立ち会う。それならいいでしょ？」

彼女の提案をしぼし検討した。断る理由は見つからない。気は重かったが、仕方ないと心を決め、わかった、とうなずいた。

優介、四十九日に来るって。電話の向こうで姉が言う。お通夜にもお葬式にも来ないなんて親不孝だよね——。たしかにそのとおりだった。姉の言葉を聞くうち、後ろめたい気持ちが大きくなり、電話を切ってしまいたかった。でもそうはいかない。大きく深呼吸をして、ドキドキしながら母の返答を待った。

「優介？」

母だった。いきなり電話口に来ると思わなかったので驚いた。

「仕事が忙しいんだろうから、四十九日も無理しなくていいよ」

「いや、行くよ」

「そう？」

「うん。行くよ。必ず行く」

やっとのことでそれだけを伝えたと、受話器を置いた。その瞬間、どっと疲れが出て、床に座り込んでしまった。

「大丈夫？」

彼女の言葉にうん、とうなずいたが、力が抜けたのか立ち上がれない。我ながら情けなかった。

「実家に行くのって、そんなに大変なんだ」

「大変っていうか……」

ほかの言葉で表せないか考えてみたが、どうしても思いつかない。

「うん、大変、だね」

彼女がぷつと噴き出した。僕もなんだか可笑しくなり、あはは、と笑った。さっきまでの緊張が、ウソみたいになくなった。

### (3)

---

「じゃあ行ってくるね」

翌朝、彼女は出張に出かけた。デパートのバイヤーをしている彼女は出張が多い。今回は日帰りだが、泊りがけのこともある。僕はフリーでプログラムを書いている。今日は午後三時まで仕事をしたあと、客先で打ち合わせ。夕飯は、どこかで食べることにしよう。彼女は遅くなると言っていた。

朝食をとり、仕事を始める。昨日までうまく処理できなかった個所が簡単にクリアでき、思わずやった、と声が出た。昨日までの、もやもやした気持ちがウソのようだ。今なら何でもできそうな気がする。作業は順調に進み、翌日やる予定だった分まで完了した。この分なら、納品も早めに出来そうだ。

午後三時に作業を終え、作り置きサンドイッチをつまむと、服を選んだ。今日訪れる客先は、常連のお客さんが紹介してくれたところだ。失礼があってはならない。

清潔感を出し、丁寧な仕事をしますと主張する。奇をてらわず、基本に忠実でありながら、決して埋没しない。ネクタイは海外ブランド。それも一時撤退後、日本に再進出したところだ。キーワードは、実績を伴う自信。これまでしてきたことをアピールするにはちょうどいい。

ネクタイが決まれば、スーツも靴も決まる。顔を洗い、ひげを剃ると、「戦闘服」に着替えて家を出た。

「今日はわざわざお越しいただいて、ありがとうございます」

「いえ、こちらこそ、呼んでいただいて光栄です。今後ともよろしく願いいたします」

打ち合わせはトントン拍子に運んだ。見積もりを出すまでもないと、即契約。特に問題がない限り、自動的に更新される。あまりに上手く行きすぎて、何か悪いことが起きるのではと思い、ひよっとして父の死がその「悪いこと」だろうかと考えた。いや、まさか。そんなこと、あるはずがない。でも、もしそうだったら……？ そうしたら、この会社とは長い付き合いになるのだろうか。

「よかったらお食事でもいかがですか。近くに美味しいイタリア料理店があるんです」

「いいですね、ぜひ」

担当者はうなずいて、僕を誘導しながら話を続けた。

「最初は高級路線だったんですが、あまりに客が来ないもので、気軽に入れるカジュアルイタリアンに模様替えしたんです」

「そうなんですか」

「でもカジュアルになってからのほうが、味はいいですよ」

「それは楽しみだ」

## (4)

---

担当者は川原といった。陽気な男で、年齢は二十代後半だろうか。あまり僕と変わらないように見える。顔を合わせるなり若いですねと言われ面喰ったが、理由を聞いて納得した。高木さんがあまりに誉めるので、年配の人だと思った。川原はそう言ったのだ。

高木さんは――僕によく仕事を依頼してくれている常連さんだけれど――今時の若者はなっとらんというのが口癖だ。もちろん君は違うけどな、と必ず付け加えるのだが。僕がそう言ったら、川原は笑って相槌を打った。初対面とは思えないほど話が弾んで、いつの間にか契約に至った。そんな感じだった。

これほど相性のいい担当者に会ったのは初めてかもしれない。もちろん人間としての相性と、クライアントとしての相性は別だ。それでも川原の存在は、僕にとって歓迎すべきものだ。彼がいる限り、この会社との仕事はうまく行くに違いない。

イタリア料理店のドアを開けると、店員が川原に挨拶をした。どうやら常連のようだ。促されるままスーツの上着を脱ぎ、カバンも預けた。すると、店長らしき男性が近づいてきた。

「申し訳ありません、川原様。少々お時間をいただけますか」

川原はざっと店内を見まわし、ん、とうなずいた。

「ちょっと、ごたごたしてるみたいですけど、先に飲みましょう」

あ、はい、と言って、僕は川原のあとを歩く。何がごたごたしているのか、さっぱり分からない。

「よいしょっと」

そう言いながら、川原はバーの椅子に腰を落ち着けた。そして僕に顔を近づけ、すぐ後ろのカップルのせいですよ、と言った。

「え？」

「だから、店がごたごたしてる理由」

はあ……と言いながら、後ろへ目をやった。女性が酔っぱらって、男性に絡んでいるようだ。腕を強く引っ張ったかと思えば身体をぴったりとつけ、男性の首に両手を回し、頬に口づけをする。かと思えば、身体を離して大声で泣き叫ぶ。見ていられず目をそらすと、バーテンと目が合った。

「何になさいますか」

考えていると、川原がいつもの、と言い、こちら様も同じもので、と尋ねるバーテンにうん、とうなずいた。

「何ですか、いつものって」

「飲めば分かりますよ」

「はあ……」

川原はうーん、と言いながら大きく伸びをした。丸椅子に腰かけたまま身体をそらすので、転げ落ちるかと思ったが、腰はしっかりと椅子に貼りついたように動かなかった。

「せっかくいい気分だったのに、台無しだ」

「え？」

「公共の場で酔っぱらうのって、恥ずかしいじゃないですか」

「あ、まあ、そうですね」

「酔っぱらいほどみっともないものはありませんよ」

川原の声は次第に大きくなった。

「何が嫌って、女の酔っぱらいですよ。僕はこの世で、女の酔っぱらいが一番嫌いなんです」

聞えよがしにというのか、声がさらに大きくなった。まさか、喧嘩を売るつもりなのか。後ろにいた二人が立ち上がり、こちらへ向かう気配がした。

「ちょっとあんた！ 文句があるならはっきり言いなさいよ」

後ろの女性に違いない。僕は小声で、まずいですよ川原さん、と言った。でも川原は立ち上がり、いいとも、この際だからはっきり言ってやる、と応じた。僕はもう聞いていられなくて、背中を丸め、両耳に手を当てて嵐が過ぎ去るのを待った。

まずいまずいまずい——。それだけを考えていた、そのとき。

右肩を引っ張られ、バランスを崩して椅子から落ちた。何とか身体を支えようと思ったが、手を置けるようなところはどこにもない。僕の両手は不格好に宙をさまよっただろう。もしかしたら、空を飛ぼうとしているように見えたかもしれない。

「あいてて……」

目を開けると、川原が心配そうにのぞきこんでいる。大丈夫、と僕が手をひらひらさせると、川原はホッとしたように笑った。後ろには店員が数人いて、囲まれるように女性が立っていた。服装からして、後ろのテーブルで酔っぱらっていた、あの女性だ。

その姿には見覚えがあった。いや、見覚えがあるところではない。今朝見たばかりだ。でも、まさか。彼女は出張に行っているのだ。たしかに帰りは遅いと言ったけれど、まさか、こんなところで飲んでいるなんて。

ふとある考えが浮かび、ごくりとつばを飲んだ。

まさか……酔っぱらっていたのは、彼女なのか？

立ち上がり、ふらつきながら女性に近づいた。途中、男が突っかかってくるが、邪魔だ、とはねのけ、女性のところへ行った。

気配を感じ、女性は顔を上げた。両目が大きく見開かれる。目は充血し、腫れぼったくなっている。帰ってから、冷凍庫のタオルを目に当ててるのだろう。だからあれほど言ったのに。酒を飲んで泣くのはやめろって――。

「優介……」

彼女は涙をこぼした。僕はズボンのポケットからハンカチを出した。カバンにはタオルが入っていたけど、預けてしまったから。

「おい！」

左肩を後ろに引っ張られた。先ほどの男だろう。彼女はハンカチを受け取り、やめて、と言った。肩をつかんでいた手に、一瞬のゆらぎが感じられ、そして離れた。

四十九日法要の前日、僕は上野駅から列車に乗った。実家へ帰るのは久しぶりだ。この前、母の電話で帰ったのは、去年の秋だったか。年末年始もずっと東京だった。フリーで仕事をしていると、曜日も時間も、季節も関係なくなる。上野駅の売店で桜の葉をあしらった駅弁を見て、そういえば春だった、と思う程度だ。

それでいいと思っているわけではない。でも仕方がないのだ。今さら会社勤めができるとも思えない。彼女は、今からでも面接受けたらいいのに、とよく言っていたけれど……。

「ごめんなさい」

店から一緒に帰宅して、彼女は僕に頭を下げた。出張というのはウソで、あの男と会っていたのだという。今までに何度か、出張と言っては出かけ、会っていたらしい。あまりに唐突すぎて、真剣な顔で話す彼女の存在すらもウソに思えた。目の前にいる彼女は幻で、僕が脳内で作り上げた存在なのではないか、と。

「優介のことが嫌いなわけじゃないの。ただ――」

「ただ？」

「私のほうが年上だから、いつも正しくあらねばならない気がして、何だか息がつまるっていうか……」

思わずため息が出た。そんなの、もっとしっかりしてよ、と言えればいい話じゃないか。そんな理由で、浮気したのか……。

「マリッジブルーって言うんだって。本当にこの人と結婚していいのかって不安になる。それが、私にも起こった。それだけなの」

それだけ？ 僕は彼女の顔を見つめた。それだけだって？

「本当に、それだけだって言うのか」

彼女はうなずいた。

「彼とは、何もないわ。本当よ。お願い、信じて」

穴が開くかと思うほど、彼女の顔を見た。彼女は男に抱きつき、頬に口づけをした。何もない男に、そんなことをするのか。どこの誰がそんなウソを信じるというんだ！ ふと、何もかも馬鹿らしく思えた。彼女に執着することも、彼女のウソを糾弾することも。

「もういい」

僕はため息とともにそう言った。

「え……？」

不安そうな彼女に僕は言った。

「荷物をまとめて出て行け。ここはお前の部屋じゃない」

そんな、優介、許して、お願い——。すがる彼女を突き飛ばし、朝までに出て行かなかつたら警察呼ぶぞ、と言い残して部屋を出た。

口の中に、苦味を感じた。桜の葉のせいばかりではないだろう。

駅弁は旨かった。思えば、こんな風にゆっくり味わって食べたのは久しぶりだ。忘れていた感覚を、取り戻したような気がした。

「おかえり、よく来たね」

半年ぶりに会う母は、少しやつれたようだった。父の死が堪えたのかもしれない。

「ずいぶん早いお出ましね。明日にならなきゃ来ないと思った」

姉の言葉に、うん、まあね、と返す。姉は不思議そうに僕を見た。

「何かあったの」

「別に、何もないよ」



「だって普段ならうるさいなあとか何とか、必ず言い返すじゃない」

「俺も大人になったってことだよ」

「そう？ ならいいけど」

姉は踵を返し、時折振り返りながら居間のほうへ行った。やはり姉は鋭い。滞在中に、すべて白状してしまうかもしれないな、と僕は思った。

「ねえ優介、お茶飲むよね」

居間から姉が大声を張り上げる。負けじと大声で、飲むよ、と返した。すかさず母が言った。

「何ですか、お行儀の悪い」

「だって、仕方ないだろ。遠いんだから」

「そういうときは、近くまで行って話すのよ」

ちえ、と僕はふてくされた。もちろん本当にふてくされているわけではない。ここへ来たらそうするのが適当な気がした、それだけだ。

そのとき、居間から姉が顔を出した。舌をべろりと出している。やっちゃった、と言いたげなその顔に、思わず嘔き出した。振り返った母が、これ、と姉の方へ行く。姉はあわてて顔を引っ込め、おとなしく居間のテーブルの前に正座した。

「何か、変わらないね」

淹れてもらったお茶をすすり、僕はつぶやいた。そうね、と姉が言う。

「お父さん、いなくなっちゃったけどね」

「うん……」

父は仕事が忙しく留守がちで、ほとんど会話もなかった。話があると言われれば、ほぼ間違いなく説教。僕にとって父は、煙たい存在だった。少なくとも、高校を卒業するまでは。

高校を出て就職するはずが取り消しになり、大学を受けようにも新学期はとっくに始まっていたから、必然的に家でぶらぶらすることになった。アルバイトをしようと思い、いくつか電話をかけてみたが、高校生ならよかったんだけどね、と言われて断られた。よく分からない理由で断られ、すっかり自信を失っていたとき、父から話があると言われた。

そのときは、ただ気が重かった。それまでと同じように、説教されるものだと思っていた。でも僕が父の前に座ると、父は大きな封筒を差し出した。

「東京に行ってみたらどうだ」

「東京？」

「ああ。専門学校の願書が入ってる」

封筒を見ると、たしかに専門学校の文字があった。

「でも、もう新学期始まってよ」

「大丈夫だそうだ」

「え？」

「日曜日に、試験を受けさせてくれるそうさ。どうだ、受けてみないか」

もう一度封筒を見た。専門学校では、コンピュータのことを勉強するらしい。

「お父さん……」

父は笑ってうなずいた。

「中学生のとき、プログラムのコンテストに応募したろう」

僕はうなずいた。審査員賞の名目で、プログラムの本をもらった。

覚えていてくれたんだ……。

「僕、やるよ。受けてみる」

父はうなずいて、頑張れ、と僕の肩を叩いた。大きくて力強い手だった。

専門学校を出て、いろいろあってフリーになった。本当はちゃんとした会社に入って、両親を安心させたかったけれど、最初に勤めた会社は仕事量が多くしかも給料が払われなかったので、逃げるように辞めた。

そのあと専門学校の仲間とゲームソフトの会社を立ち上げたが、いちばん信頼していた人間に金を持ち逃げされ、ショックを受ける間もなく、開発中だったゲームが別のところから発売になり、どん底へ叩き落とされた。

何度も実家に帰ろうと思った。でも帰れなかった。父の顔を見ることができなかったのだ。フリーで仕事をするようになってからも、どこか後ろめたい気持ちがあり、それこそ父が倒れたとか、そういうことでもなければ、帰れなくなっていた。父が亡くなっても、相変わらず足が向かなかった僕は、親不孝としか言いようがない。

「優介、ちよつと」

顔を上げると、母が廊下から手招きをしている。立ち上がって、母のところへ行った。

「あんたの部屋に、お父さんのものが置いてあるから、見てきてごらん」

「お父さんのもの？」

「そう。遺品よ」

「何で僕に……」

「お姉ちゃんにはもう見てもらったから。今度はあんたの番」

振り返って姉を見ると、姉はうん、とうなずいた。

ぎし、ぎし、と音を立て、階段をのぼった。自分の部屋に入るのは何年振りだろう。階段をのぼりきったところに、絵が掛けてあった。こんなところに、絵なんてあったかな。そう思いながら、自分の部屋へ行く。ドアを開け、一歩足を踏み入れると、昔の記憶がよみがえった。

小学生のころ、夢中で読んだ冒険小説。表紙はぼろぼろに擦り切れている。中学生のころ、大好きだったアイドルのポスター。上からサッカー選手のユニホームをはりつけ、アイドルを隠ぺいした。彼女が結婚して引退したとき、本気で裏切られた気になった。

机の上の棚に、リボンのついた箱があった。これは――。

高校生のとき、初めてできた彼女にあげた香水だ。別れるとき、突き返された。全然好みじゃなかった、センスないね、という捨て台詞とともに……。ため息が出た。あのときから、自分は全然進歩していない。

ふと、部屋の隅にある大きな額縁に目が止まった。一枚ではなく、何枚か重ねてあるようだ。額縁に入れるものと言ったら、絵か。でも、絵を描いた記憶はまったくない。不思議に思いながら、額縁のところへ移動した。

一枚持ち上げてみると、それは風景画だった。待てよ。この風景、どこかで見たような……。そうだ、あの絵。

部屋を出て、先ほどの絵を確認する。構図も景色も、まったく同じだ。ただひとつ違うのは、部屋にあった絵には、人物が描き込まれていた。目の前の絵には、人の気配がまったくない。

「お父さんが描いたのよ」

母が、いつの間にか僕の隣に立っていた。

「お父さんが？」

母はうなずいた。

「これは、みんながいなくなったあとの家」

え……？ 意味が分からなかった。母は僕を見て、にっこりと笑った。

「部屋にある絵は、あなたたちと、私とお父さん。家族を描いたものなの」

僕は部屋に戻った。そして部屋の隅から額縁をすべて取り出すと、床の上に並べた。絵の中で、子どもと思われる人物が、だんだん大きくなっていく。同時に夫婦と思われる人物も、だんだん年を取っていた。

「お父さんね、家族が大好きだったの」

母は、並べられた絵を愛おしそうに見つめている。

「でもいつかは家族を卒業するんだって、最近はそればかり」

母は絵の前に座り、描かれた人物を優しく撫でるようにした。

「こんなに突然、卒業しちゃうなんてね……」

母の声に、かすかなゆらぎがあった。両肩が小刻みに震えている。それを見ながら、僕は何もできなかった。大丈夫だよと声をかけることも、肩を抱きしめることも。自分がいかに非力であるか、あらためて突き付けられた気がした。

大きく息を吐き、母は立ち上がった。

「大丈夫だよ、優介」

母が笑顔を見せる。

「私は大丈夫。お姉ちゃんも大丈夫。だからあんたは、自分の信じる道を行きなさい」

しばらくの間、何を言われているのか分からなかった。

「――って、お父さんが言ったの」

「え？」

「亡くなる間際にね、そう言ったの。大丈夫だよって、優介に伝えてくれって」

「大丈夫だよって、僕に……？」

母はうなずいた。

お父さんが、僕に……？ 僕は東京に行ったきり、ずっと帰らなかったのに。お通夜にも葬儀にも、来なかったのに……？

「そんなに顔くしゃくしゃにしないで。大丈夫だって言ったでしょ」

うなずきながらも、涙が止まらなかった。父が大丈夫と言ってくれた。そのことが嬉しかった。

年に一度か二度、短い時間しか顔を見なくても、父には僕の抱えるものが見えていた。もっと頻繁に帰っていたら――。そうしたら、父から色んな話を聞いたのに。そのことが悔やまれてならなかった。

母は優しく僕の肩を抱き、背中をさすった。さするたび母は、大丈夫だよ、と言った。その言葉に涙が出た。歯を食いしばり、声を上げないようにしたが、母はお見通しだった。大丈夫だから、そう母は言って、それまでよりも強く僕の背中をさすった。肩の力がすうっと抜けていく。僕は母に身体をあずけて泣いた。母の身体は、いつの間にか僕よりずっと小さくなっていた。

おわり

父の描いた絵

<http://p.booklog.jp/book/80010>

著者：比良岡美紀

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/miki-hiraoka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/80010>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/80010>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ